

## オーストリア・チロル州における海外巡検の実施とその教育効果

坂本優紀\*・猪股泰広\*・岡田浩平\*・松村健太郎\*・呉羽正昭\*\*・堤 純\*\*

\*筑波大学大学院生・\*\*筑波大学生命環境系

本稿は、オーストリア・チロル州において実施された筑波大学の学部生向け巡検の事例報告である。海外巡検においては、言語環境や渡航手続きなど、日本国内での巡検と比較して困難が多い。しかし、景観観察や土地利用調査などのような言語能力をそれほど要さない調査手法を用いることで、その障壁を取り払うことができる。また、渡航地の地域事情を熟知した教員による事前・事後指導を必要十分に行うことで、現地でのトラブルのリスク軽減や教育効果の向上も期待できる。今回の巡検では、学生の調査成果を、TAの準備にもとづきながらGISを用いてまとめ、考察するようなレポートを課したことで、学生にとって既習の技能の確認の機会も得られた。以上のような工夫をすることで、大学教育における海外巡検を可能にし、国内巡検では得られない地理教育的効果を学生に与えるものと考えられる。

キーワード：海外巡検、地理教育、景観観察、土地利用調査、GIS、オーストリア・チロル州

### I はじめに

本稿は、2017年7月28日から8月1日の5日間に渡って実施した筑波大学生命環境学群地球学類の開設科目「地誌学野外実験B」（オーストリア・チロル州巡検）の事例報告である。全国の大学の地理学教室において巡検が実施されていることはいうまでもなく、巡検時に行った調査内容をまとめた報告書は数多く発行されている。しかし、海外を対象に行った巡検報告は、前島（1997）や兼子・呉羽（2015）があるものの、管見の限り多いとはいえない状況である。

筆者らが担当する筑波大学生命環境学群地球学類では、他の学問分野と異なる点の一つとして野外実験（巡検）を教育に取り入れ、それを重視してきた。これまでの巡検は主に日本国内のフィールドを対象にしてきたが、今後は学群（学部）教育に海外巡検を組み入れ、教育効果やグローバル人材育成という視点からみてその位置づけを明確にし、体系化を図ることを目指してきた。

海外をフィールドとした巡検を実施する場合、

日本もしくは現地の旅行代理店に依頼し、航空券の手配や宿泊先の確保、現地での移動手段の準備を委託する場合と、国内の巡検と同様に、現地までの往復は参加者の自由とし、巡検中の手配を教員が行う場合があるが、今回は後者の事例である。前者は煩雑な事務手続きや手配作業、金銭管理を全て業者に委託できる長所がある。一方で後者の長所として、柔軟な日程変更が可能になること、巡検前後の行程を自由に設定できることがあろう（兼子・呉羽、2015）。今回のチロル巡検においても、9名の学生が地形学分野のスイス巡検から連続して参加した。また、インスブルックでの現地解散後、翌日の8月2日の帰国便に乗った学生はわずか6名にすぎず、それ以外の学生やTAの大学院生は滞在日数を伸ばしてウィーンをはじめヨーロッパの他都市にまで足を伸ばしてから帰国した学生が多かった。

そこで本稿では、大学の授業の一環として実施した海外巡検を対象とし、本巡検実施に際して行った事前指導や事後指導の内容を含めて体系的に報告することで、さまざまな大学において海外